野村生涯教育だより

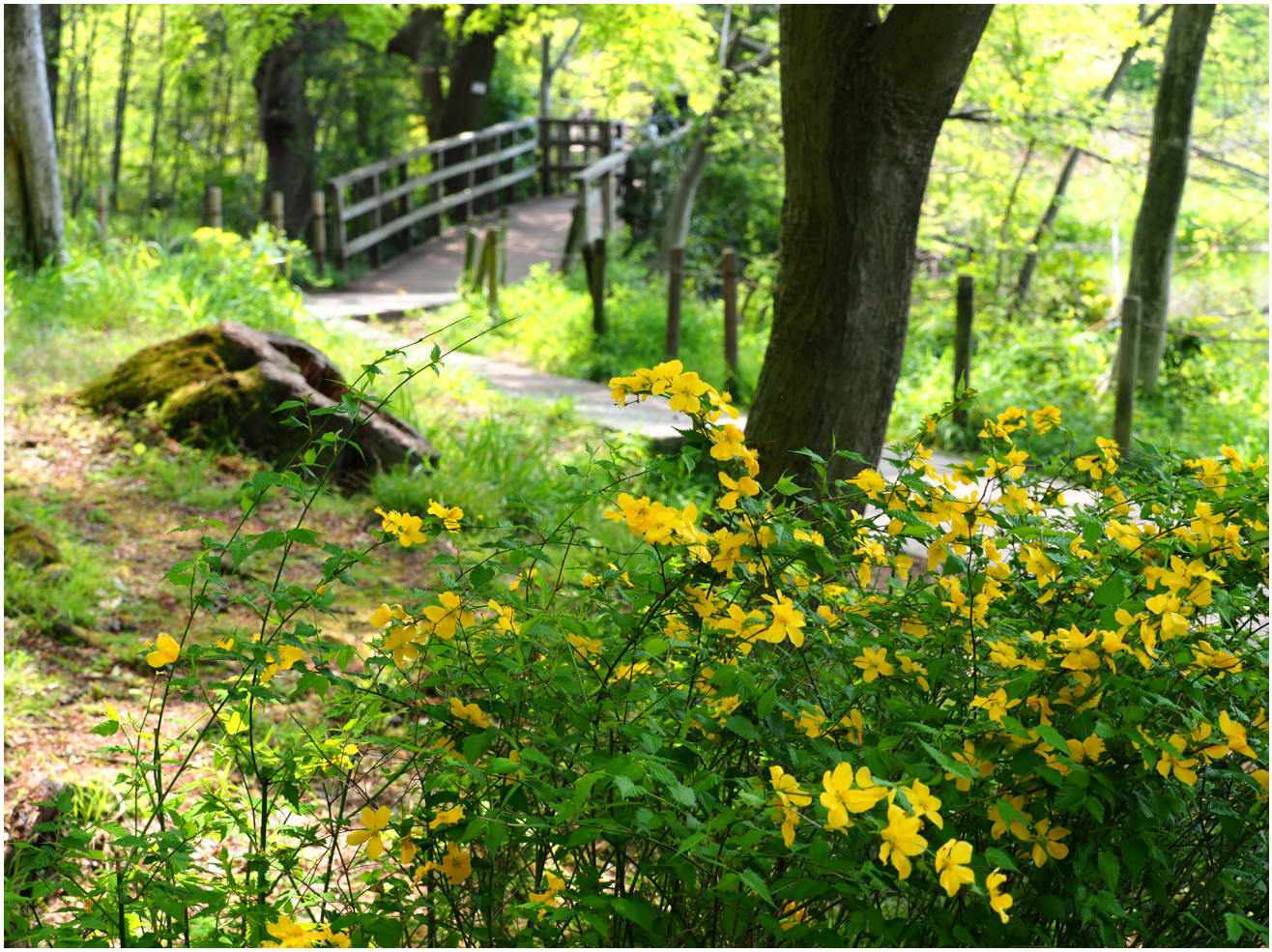
No. 422

発行所
公益財団法人 野村生涯教育センター
東京都渋谷区代々木 1-47-13 〒151-0053
TEL 03-3320-1861　FAX 03-3320-0360
URL www.nomuracenter.or.jp

（公財）野村生涯教育センターのシンボルマーク
［n］は、名称「Nomura」と、基本理念「自然観＝Nature」の頭文字を表している。

もくじ

● 新型コロナウイルスの課題 2
● 公益財団法人第 8 回設立記念式
● エマラ女史より金子理事長への書簡
● 幼児教育部第 43 期修了式
● 触れ合う条件を課題に　静岡支部
● 学ぶよろこび



いよいよ大型連休に入りました。四月十六日、国は限定的だった〝緊急事態宣言〟を全国に拡大し、大型連休を前に感染が広がる大都市から地方への流入を防ぐ方針を打ち出しました。方策を施しても終息はむずかしいが、施さなかったら大変な数の感染者が出る、との見通しに、出口の見えない不安感に私たちは苛まれています。

眼に見えないウイルスが、わからない間に人間の体に入り込み、その人間の繋がりによって全世界に拡散されている、そして誰でもが、いつ命が危険な状況になるかもしれない、という現実に、私たちは遭遇しています。

この現実が私たちに問いかけていることは、今こそ、人類の大きな転換を迫られているのではないか、と思います。

そのためには、私たち一人ひとりの意識から変えていかなければならないし、私たちにできることからできることをやっていきたい、と思うのです。

人類は現在までさまざまな進歩を遂げ、その歴史のなかでも科学技術の進歩は二十世紀後半以降、加速度を増し、急速な国際化、高齢化などの社会改革をもたらしました。またそれは外なる環境を分析、開発し、人間の生活を豊かに効率よく、便利に過ごせるようにさせてきました。

しかし考えてみると、ここ数十年の社会、世界は、便利以上の社会になり過ぎ、飽くなき人間の欲望を助長する側面も持つようになり、人間のバランスも、生態系のバランスをも失いはじめているような実態ではないかと思うのです。

私たちは自然界に生物（人間）として他の動植物と共に生きてきた歴史をもちます。なのに、日々の生活のなかで無自覚でいますが、他の動植物の生存場所を開発のために奪ってしまっている。その結果、今の時代が生み出されているのではないか。「自然界に生かされている人間」という観点から見ると、そのように思うのです。

それを前提に、もし人間のエゴや欲がさまざまな動植物の生存場所を失わせてしまった側面があるならば、まずそこへの反省という観点で、私たちの意識を見つめ直す必要があるのではないでしょうか。そして、動植物への見方と同時に、足もとの人間同士の関係で〝共に生きる〟より〝自分ファースト〟、そういった相手のことを考えない自己中心の自分と向き合い、認識することが、実は、新型ウイルスから提起される課題として受け止めることではないかと思います。

新型コロナウイルスの課題2

理事長　金子由美子

現実にこの問題が発生して数ヶ月、世界中で外出禁止、或いは自粛を余儀なくされている私たち人間は、家にいることが多くなるなかで、その不安感の持って行き場を身近な人や家族に向けてしまいがちです。今、一番協力し合わなければならない「身近な人」なのに、です。

ウイルスの感染拡大はとても恐ろしいですが、このウイルスが終息したとしても、このままでは終息後の社会がどうなるか、それも恐ろしいです。

そのことを含め今の事態を克服するには、まず「社会は自然につくられたものではなく、私たちがつくった社会、世界であること」そして足もとでは「私たちがいる家族、家庭は、自らがつくりあげていくものであること」に目を向け、まず身近にできることとして足もとの人間関係から調整を図り、〝共に生きている〟ことを念頭に、人間としての行き過ぎた自己中心性、そして心・身と環境のバランスを欠いた生き方を、今、本当に見直すことの大事さを思います。

経済は必要です。私自身も肉や魚、野菜など、夜スーパーに行ったら一つもなかったとき、やはり不安になりましたし、トイレットペーパーも棚に並ばなくなってみて、紙がどれほど大事なものかと思いました。経済が疲弊すれば、私たちの生活は確かに成り立たなくなるのだということを垣間見る今の現実です。

しかしこのように新型ウイルスに悩まされる毎日の中で、改めてそれ以前の社会を振り返ったとき、成果、効率や経済ばかりに意識があった人類ではなかったかということ、だからこそ新型ウイルスの終息以後の私たちのあり方を視野に入れながら、この課題を考えていく必要を思います。

（四月三十日記）

公益財団法人
第八回設立記念式

当センターは新年度明け四月一日（水）が、公益財団法人設立記念日に当たり、例年この日の午前、設立を記念して、各地域でお祝いの式を行っている。

今年は、新型コロナウイルスの急速な感染拡大が世界的に緊迫度を増すなか、日本でも地域によって感染者数、そして会場の開館状況が違い、主体的にこの会をどうしたいのか、をそれぞれの動機に戻って考え合い、課題とした。そうしたなか、本部では徹底した感染拡大防止対策を講じ、東京近県支部からの出席者は、それぞれが自分の体調管理、家族との関係を考慮し出欠を決め、結果、小規模な形で行うこととした。

第二研修会館で行なわれた記念式では、はじめに研修・地域担当の板井秀子さんが挨拶、続いて、故吉成知加子専務理事の『財団設立の経緯について』、そして創設者野村佳子初代理事長の『財団設立にあたって』のCDを拝聴した。一九八一年に財団の認可を得るまでの厳しい八年の道のりを通して、創設者の、常に自らの課題にしてきた諦めない精神を心に刻み、改めて今の厳しい社会状況を課題にすることの大事さを、身の引き締まる思いで受け止めた。

挨拶に立った金子理事長は次のように述べた。

「今日のこの半日は貴重な時間でした。

公益に資するということが求められる組織として、この社会の状況下で財団設立の日を私たちはどうしたらいいのか、どのような判断をし、その判断を正しいものにするためにどうあったらいいか、を模索した日々でした。しかし、CDを聞かせていただき、皆さんからのご発言を伺い、このように記念日がもてたこと、本当に感謝だと思いました。

創設者は常々『とかく組織が大きくなり、揃うものが揃うなかに、本質が失われていっている』とおっしゃっていました。まさに今、世界的な課題である新型コロナウイルスのことから、本当に大事な価値とは、また失ってきた本質とは何か、を改めて私たち一人ひとりが問われていることを思います。

また以前、創設者は『道に適わないことをしたならば、天下が乱れる。そうすると国民が不幸になる』と水戸光圀が将軍を諫めたお話をされ、続けて儒教四書五経の礼記から『格物、致知、誠意、正心、修身、斉家、治国、平天下』の八条目をあげ『天下を治めるには、まず宇宙普遍の道理に基づき、己の私欲を離れ、心を正し、身を修め、さらに天下を案じる。為政者としてもし天下を治めるのならば、こうした順序に従わなければならない』と述べられました。そして『民主主義の今の時代は、一人ひとり自らを正さなければならない。そして平和な世界を成就するためには、一人ひとりが心を正し、身を修め、家を斉めて、国の動向にも、地球そのものの存続にも責任を取るという自覚が今を生きる人間には絶対に必要だ』とおっしゃいました。

経済中心の価値観のなか、利益追求が急がれ、大事な価値が見失われている社会で私たちはこうして人としての道を説いてくださる場に身を置かせてもらえることが、どれほど貴重なことか。

そしてCDのお言葉のなかに、文化、教育というものは伝達の作業であること。また伝統の継承とは、そのままを復元することではなく、古いものからどう選び取って、今の時代に相応しい物を、何を還元していくかが重要だ、とありました。

私たちは、公益法人の一員として、時代によって変わることのない価値を、時代に相応しい形を模索し、抽出して、世代間、民族間の違いと時代の変化を越え、伝達していく責任があることを思います。

これだけ新たなウイルスが蔓延するなかで、さすがに私たちは、自分だけの幸せはもうあり得ないと、骨身に沁みてきていると思います。それゆえに一人ひとりがいただいてきた価値を確認し、社会に還元できる自分自身を培っていくことを、是非していきたいと思います」と締めくくった。

改めてこの状況下ゆえに、学びの原点に戻ると共に、何のためにこうした会を行うのかを自己に問い、公益に資する意味を確認する、意義ある日となった。

エマラ女史より金子理事長への書簡

数年ぶりに故郷のガザに戻り、現地のチームと共に活動を再開したパレスチナ支部責任者アマル・アブゥ・エマラ女史からは、間断なく現地の様子や抱えている思いを綴るメールが届いている。三月十四日のメールには「ガザの包囲網に良い側面があるとするならば、人の出入りが制限されていることで新型コロナウイルスの感染者がまだ出ていないことでしょう」とあった。

しかしその後、ガザでも感染者が確認されたという報道があり心配していたところ、三月二十九日に金子理事長宛に次のメールが届いた。

満月が恋しい闇夜です。

困難な日々が私たちすべてに続いている中、神に祈ります。

ガザでは学校も地域の集まりも禁止され、ヨルダン川西岸地区ではこれまでに七十人が感染しました。キリスト教の復活祭は中止され、ナザレにある生誕教会も受胎告知教会も閉鎖されました。

このような時に、私は、地球はひとつ、そして一人ひとりの命の貴重さを教えてくださり、そして皆でその理想を分かち合うことを掲げた日本婦人のことを思わざるを得ません。

私たちは懸命に自己中心の考えを排し、他者を思う努力をしてきました。人類の文明を守るために、そして命とその価値を守るために、すべての文化を尊重し、私たちの道徳心と価値を示そうと思います。

しかし、世界は私たちの声を聞こうとしませんでした。戦争を叫ぶ声とその支配力が勝っていたのです。新しい技術の進歩が持つ可能性は、迅速なハイテク武器の開発と誰かが線引きしたであろう許容範囲の破壊のために利用されています。その結果、

ガザにて

人命を奪う新型コロナウイルスが出現し、それは東も西もなく、国境も関係なく、あらゆる相違の差別もなく蔓延しています。私たちは、自らの手で自らの文明を破壊する境界点にいるのでしょうか？

私たちの夢も、創設者の理想も、未だ実現されていません。代わりに私たちが恐れていることが現実となってきています。この悪夢に終わりは来るのでしょうか？ その終わりは明日ではなく、今日であってほしいと思います。

人間は、神から与えられる空気、自然、水を当たり前のこととして称えることをしませんでした。それらすべての恵みに感謝をせず、それどころか、母なる地球を枯渇させ、荒れ果てた大地に変えようとしています。

現在起きているこの状況は、『足るを知る』ことのない私たちへの罰なのでしょうか？ それとも、暴力を排除し、人類の平和な安息の地を求めよという教訓なのでしょうか？ 私たちの未来のために、私たちの孫たちの未来のためにこの災禍を止め、このことから学ぶことができたら、と願います。今ここで希望を失うわけにはいきません。他に選択肢はないのですから。

桜の精神が日本の皆さまと世界のために続きますように。

どうぞお体大切になさってください。

私たちの愛する人が一人も失われませんように。

幼児教育部
第四十三期修了式

新型コロナウイルスの急速な感染拡大が世界的に続き、収束の兆しが見えない緊迫した状況のなか、三月末の幼児教育部第四十三期修了式について、何とか修了生を少人数の中でも送り出したいと金子理事長はじめ本部では検討を重ね、多くのメンバーの気持ちも受け止め、開催を決めた。刻々と変化する状況を踏まえながら事務局のメンバーも共に感染防止のきめ細かな対策を練り準備を進めた。

当センター第二研修会館二階をメイン会場とし、家族に持病を持つ人、高齢のメンバーは一階で映像を通して式に参加できるように考え、どちらの会場も人数を考慮し、椅子の間隔をあけ座席を配置した。また一般、高齢者と子どもたちが極力接触しないよう、会場に入る時間をずらすなど工夫をした。例年は東京近県の支部からは多くのメンバーが集まり、修了生を送り出しているが、今年は一人ひとりが家族と話し合い、主体的に自らの責任において参加を決めた。

三月二十七日（金）の修了式当日、参加者は自宅にて検温、マスクの着用、受付にてアルコール消毒後、決められた動線に従い会場に入り、修了生の入場を待った。

今期修了生は、渡利優華さん（千葉）、十文字櫻さん（東京）の二名。

はじめに挨拶に立った幼児教育部責任者の生形由紀さんは「幼児教育部は、創設者が野村生涯教育の理念のもと、子どもたちを自然児として育てることを願われ、発足後、四十六年の歴史を積み重ねてきました。人間関係の原型が作られる大切な幼児期を親子で毎日センターに通い『子どもたちの教育はいついかなる場合にも親の自己教育である』のモットーのもと、母親は子どもたちの姿や仲間との人間関係を通して自分を知ることを学んできました。

この厳しい状況のなかで、理事長をはじめ本部、先輩方の温かい思いをいただき、本日修了式を迎えさせていただいたことに心より感謝申し上げます」と述べた。

そして理事長から修了生に修了証書と記念品が手渡され、二人はそれぞれ緊張の面持ちで受け取った。

引き続き理事長が「お祝いのことば」を贈った。「今年は令和二年、西暦では二〇二〇年です。この年に、この社会状況の中での修了を思ったとき、社会的にも、またセンターにおいても大きな転換の時を迎えていると感じています。新型コロナウイルス感染症がなかなか収束に至らない社会、世界の状況があり、そして東京オリンピックが史上初の延期となりました。センターでは創立記念式を中止、四月の定例講座開講も延期という苦渋の決断をしました。当センター始まって以来の状況を、今私たちは目の当たりにしています。時代の大きな転換期には大きな変化を伴います。このような激動の時代にあって、変えてはならないもの、変わらない価値があることを、私たちは終始学んできました。

修了生のご両親に是非お伝えしたいことは、激変する時代に、親が、大人が何を見据えていくのかが大事だということです。悩むこと、考えることの大事さを受け止めていくこと。そしてピンチをチャンスに変えることができるということ。そこにこそ人間の叡智が生まれてくるはずです。時代のせいにするのではなく、親が時代を見つめ、自分がどうあったらよいか、何が大事な価値かを見据えていくなかで、修了生の二人が社会の中で逞しく、そして社会のために貢献できるような人間性を開発されることを信じます。

この修了式が二人にとって思い出深いものになるようにと願い、出席者の皆さん、特に高齢の方々をどう守りながら、どうしたら共にお祝いができるかを考え抜いて、今日を迎えました。また支部メンバー

の方々で、本当はこの場でお祝いをしたい気持ちはあるけれど、ご自分の体調やご家族の心配を踏まえ参加を見送られた方もいらっしゃいます。そうした皆さんの真心の中で門出を迎えられたお二人には、今度は小学校で新しいお友だちをたくさん作って、いただいた皆さまからの思いを大事に、お友だちのことを思える人に育ってほしいと思います」

続いて幼児教育部副責任者の村岡智子さんが「送ることば」として、修了生それぞれの幼児部に通い始めた頃から今日までの成長の様子や、一緒に過ごした日々の思い出を語った。「優華ちゃんは大阪から東京に引越し、四歳の頃からお母さんと幼児部に通うようになりましたね。はじめは自分の気持ちを出せずにいましたが、周りの人たちに声をかけてもらい、少しずつ自分の気持ちを言えるようになりました。お母さんが自分の気持ちを出すことを課題にし実践されるなか、優華ちゃんは修了生になると、徐々に一番上のお姉さんという自覚ができて、時には年下の子にしてはいけないことをはっきり言う姿が見られました。

櫻ちゃんは生後二ヵ月の時からお母さんと通いましたね。六年の間に三人姉妹の一番上になった櫻ちゃんは、お姉ちゃんだけどお母さんに甘えたい時もたくさんあって、泣きながら全身でお母さんに訴えたこともありました。よく聞いてみると『お家で妹が言うことをきかないの』という気持ちが出てきて、その思いをお母さんに抱っこしてもらいながら受け止めてもらいました。

毎日幼児部に通い、理事長さんはじめ多くの方々の愛情をいただいて過ごしていることが今の時代、本当にありがたく幸せなことだと思います。センターで逞しく育てていただいた二人なら、どんなことでも乗り越えていかれると思います」と語った。

それを承け、修了生がお礼を述べ、その家族から「孫は病気をして途中休むこともありましたが、こうして今日を迎えられたこと、本当に感謝の気持ちでいっぱいです」「一見マイナスに思えることでも、自分にとってそれが何なのか、何を示唆されているのか終始教えていただきました。親としての責任がとれるようにこれからも学んでいきたいと思います」「温かい修了式を本当にありがとうございました。親子三代で学ばせていただいていることが本当に有り難いです」と感謝の言葉が述べられた。

最後に幼児教育部の羽田野麻衣子さんが「終わりのことば」として「この状況下で、理事長、皆さんから心からのお祝いをいただき、修了させていただけることがどれほどありがたいことか、そして今日の日を迎えられたことは当たり前ではないことを思い、改めて感謝申し上げます」と述べ、式を締めくくった。

修了生は芸術教育部が奏でるバイオリンの音色と参加者の大きな拍手に送られ、幼児教育部を巣立っていった。

例年とは違う緊張感と厳かな雰囲気のなか、一階の参加者たちもモニターに映る修了生の姿を見ながら、拍手をし、笑ったり、涙を拭いたり、二人の成長を共に喜んだ。そして自宅からお祝いをしているメンバーの思いも籠った修了式となった。

触れ合う条件を課題に

静岡支部

当センターは創設者の出身地である静岡に研修会館を持ち、その維持管理を静岡支部が担い支部活動の拠点としている。

今年一月下旬から新型コロナウイルス感染症のニュースが多く報じられ、支部内でも徐々に危機感が高まっていた。二月始め、会館管理の窓口である友田飛鳥理事補佐は、運営会議で金子理事長が語った「顕微鏡では見えるが、肉眼では見えないウイルスが拡散されていることを考えたとき、顕微鏡でも見えない人間の意識というものが、実は拡散され影響し合っているということを思います」との言葉に、自分の意識が周囲に影響を与えていると感じた。また東京・代々木の本部事務局会議で、本部研修会館では各所のアルコール消毒、共用タオルの撤去、換気等を徹底していることが報告され、そして理事長が「専門家の方も基本は手洗い、うがいだとおっしゃり、それを徹底することが注意喚起されています。そのことから創設者が常々おっしゃっていた『基本に戻ること』の大事さを思います。人間は自然界の秩序、法則の下に生かされています。一人ひとりが生きる基本に戻り、自然界の道理に基づいた生き方をしていくことを、それぞれの立ち位置において努力するなかに、何か解決の方途が見えてくるのではないか」と述べられたことを静岡支部の責任者、副責任者に伝え、共有した。

静岡研修会館には約二十五名の支部メンバーが常駐し、また毎月の会議や講座、勉強会、四季折々の行事などに県内地域から多くの参加者が集まる。理事長の指針のもと、どのように運営していくかを話し合うなか、全国的に感染者が増え続け、責任者の鈴木愛子さんは会館を預かる立場として「感染者が出ないように」と、緊張感で胃が痛くなるような毎日を送っていた。静岡県内で初の感染者が確認され、さらに不安が募ったとき、金子理事長から三月四日の創立記念式の中止の連絡を受けた。その時、この先の不安を話すと「一人で考え込むのではなく、まず自分はどう考えるか、そして支部としてどう考えるかを繋げてください」と助言を受けた。

理事補佐をはじめ正副責任者が改めて一つひとつの集まりの目的を確認し、その上でこの状況下でどうすべきか話し合うと、今まで目的を考えたことなどなく「会があるから参加する」と受け身でいたことに気づき、安穏としていた姿勢を顧みた。

その後、理事長から毎日のように電話をもらい、責任者は「メンバー一人ひとりの気持ちや、ご家族の考えをきめ細かく聞くように」と助言を受けた。実践し、状況を報告するなかで「ここまで人さまと関わるのは大変です」と話すと、理事長から「本当に大変ですね。でも私たちもそうやって関わっていただいてきたのですよ。そしてそれが生きるということですよ」と指導を受け、人間は繋がりの中で生かされていると学んでいるが、こうして本来人さまとの繋がりの中に自分が在るのだと感じ、安定感が生まれた。それから漠然とした不安が薄れ、主体的に考えていこうと意識が変化した。

会館では毎日の清掃、給茶などを各地区のメンバーが当番制で行っている。主体的になることの大事さを地区担当者とも共有し、当番に出るメンバーには持病の有無や家族の意思を確認し、活動を自粛しているメンバーには家庭での様子を聞くなど、今までのようにはいかない条件を通して、より心を掛け合うことを課題にするなか、メンバーの家庭での実態が明らかになるなど、新たな課題も見つかった。

現在支部では、在ることを当たり前にしていた反省と共に、危機的状況を条件に一人ひとりが自己の可能性を開発する教育課題として実践している。（四月三日 記）

学ぶよろこび

総務部　後藤時子

私は約四十年前に息子の問題から野村生涯教育に触れました。手のつけられない息子をどうしたら軌道修正できるかを質問すると、創設者は「十五年かけて病ませたものを直すには倍は掛かると思いなさい。あなたが変われば子どもは変わります」とおっしゃいました。子どもの問題は夫婦の問題だと助言を受けても、夫を早くに亡くし、一人で子どもを育てていた私は、子どもが崖から落ちそうなところに夫婦の問題が何なのよ、と反発していました。しかし子どもは泥沼に嵌る一方で、先輩方から言われることに葛藤しながらも、自分の意識が変わったとき、息子にも変化が生まれ、それを実感していきました。

そうしたなか、多忙を極める創設者の身の回りのお手伝いをする役をいただき、十六年にわたり身近においていただきました。そして創設者亡き後は、大きな喪失感のなか、総務部と野村佳子記念館の管理責任者の役をいただき、今に至っています。この間時折虚しさを感じ「もう辞めてもいいかな。歳も取り私などいても役に立たないし…」と仲間に漏らすこともありました。

二年前、大きな怪我をして約一カ月動けない事態になり、金子理事長に「自分で何でもやってきた人は、人からやってもらうことを良しとしないところがある。歳を取れば誰でも体は思うようにいかない。動くことは若い人に任せて、高年だからできる心配りなど、精神を伝える責任があるのです。それを自覚してください」と指導をいただきました。しかし先月、また仲間にふと「私などいても役に立たない」とこぼしていました。その後すぐ、今度は腰を痛めてしまいました。そのことからまた理事長より同じ指導をいただき、病院でも注射をしてもらい、すぐに腰の痛みは無くなりました。数日後、野村記念館の鍵を、腰に負担をかけないよう軽い鞄に入れていたことを忘れ、うっかりいつもの鞄で出掛けてしまい、私は開館時間に間に合うよう、別の鍵をお借りしたいと理事長にお願いしました。色々とお話をするなかで「もともと私はボランティア精神などなく、道理など意識したこともなかった。創設者のおかげでその大事さを知った」と話すと、理事長は「創設者は、後藤さんが親からいただいたもともと持っている精神を引き出してくださったのですよ。もっと親子関係をふり返ってください。そのことがご自分の価値に気づくことなのですよ」とおっしゃいました。

私は四人姉弟の次女で、姉は子どもの頃に私と喧嘩したことや嫌だった思い、そして母との思い出をよく話すのですが、私は殆ど思い出せず、それがなぜなのか不思議に思っていました。以前創設者にそのことを話すと「何の不満も残らないほどあなたは幸せだったのよ」とおっしゃってくださったことがありました。私と姉は父親が違う姉妹ですが、そのことを大人になるまで知らずに過ごしました。きっと母は複雑な思いだったと思いますが、私たちがまったく気づかないほどの深い愛情で育ててくれたと思います。親から受け渡してもらった人として大切なものを創設者によって引き出していただいたのだとわかりました。

夫を亡くしてから、誰かに相談することをせず、何でも自分で決めてきた私にとって、創設者のご自宅での役は、タガをはめられ、緊張感で暇も隙間も無いという窮屈さを感じていました。しかしその役を通して、人の繋がりの中で生きていることを実感させていただいてきたと今は思います。

現在私は、総務部の中で「口うるさい大先輩」ですが、黙っていられず感じたことを若い人たちに話します。親からいただいた、そして創設者から引き出していただいたものを若い世代に受け渡していく責任を度重なるケガを通して気づかせていただき、これからもその役目を果たしていきたいと思います。